

---

# それぞれの物語      1,      「恨みの物語」

澁谷 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それぞれの物語 1 , 「恨みの物語」

### 【Nコード】

N0657J

### 【作者名】

澁谷 優

### 【あらすじ】

世界は毎日違った物語を綴っている。同じ物語などは存在しないのである。主人公である前川陸斗は、ある日一人の少女に出会ったのだ。

陸斗が目にした彼女の物語とは？

この物語もまた、世界の物語の一つにすぎないのだけど……。

## 式番目（前書き）

それぞれの物語 第一弾

## 式番目

世界は、毎回違った物語を綴っている。同じような構成なんて一つもない。ただただ静かな、壮大なメロディーを奏でながら――。

この物語もまた、そんな世界の物語の一部にすぎない。いや、すぎないというのはあまりにも酷だろうか？ 少なからず、彼女にとっては相当大きな物語だったに違いない。僕にとっては本当に、本当に小さな物語にしか思わなかったけど。……それもそうだろう。毎日を、何事もなく平凡に過ごしていた僕には、彼女の苦しみを理解するなんて到底無理な事だった。

彼女はその苦しみ故に「世界」を恨んでいたが、恨まれるのは「僕」の方なのかもしれない、と今更になって思う。

2008年10月、僕が高校一年生の時の物語。彼女の奏でた「恨みの物語」である。

木枯らしが強く吹き付ける10月の某日、僕は眠いのを我慢しながら登校した。外にはマンションや小柄なビルが立ち並び、車が走り、人が歩いている。いつもの風景である。

ここは東京都杉並区の一 corner。都心と比べればだいぶ田舎に見えるてしまう。「閑静な住宅街」という言葉がとてもお似合いだ。田舎といっても、僕はこの町を嫌いというわけではない。ゆっくり流れていく時間、都心とは違う静けさ、空気の流れ。まあ、考えればもうちょっとあるのだが、とにかく嫌いではない。

しかし、生きていれば必ずと言っていいほど嫌いなモノの一つや二つはできるものだ。例えば、さっきから僕の後ろを追いかけるように走ってきたコイツ。

「遅刻だ遅刻だ遅刻だ！！ あれ？ 陸斗じゃない。こんな時間にそんなまったり歩いてんのよ。遅れちゃうわよ？」

「朝からホントに元気だよな、お前。」

溜息一つ。まあ、僕の苦手なモノの一つがコイツだ。なんで朝からダメ出しされなきゃいけないのだろうか。一応言つとくと、コイツの名前は一瀬<sup>いちのせ</sup>姫華<sup>ひめか</sup>という。姫というだけあってか、本当に自己中心的で、周りのことは全く気にしない。欲しい物は何が何でも手に入れる、まさにワガママ王女といった感じ。別に幼なじみというわけではないのだが、姫華とは幼稚園時代からの腐れ縁がある。

「あんた、また朝飯食べて来なかったみたいね。ダメよそんなんじや。一日の始まりは朝食からって教えてもらったでしょ？ そんなんだから元気でないのよ」

「朝飯を食ってきた挙げ句、遅刻しそうで走ってきたやつに言われたくないよ。悠長に家の中で朝飯食ってる暇があるんだったら、遅刻しないようにパンでもかじりながら登校してこいよな」

と、こうは言ってる僕はというと、学校の閉門25分前に起きてパンをかじってくる余裕すらなく、こうして登校している。姫華に言える身分でもないのだ。僕もバカだなあ……。

そんなくだらない事を長々と思っていると、閉門まであと5分！  
やばい！

「なにやってんのよ陸斗！ もう時間ないんだから、早くしなさい！」

姫華は僕より少し先を歩いていた。どうやらさっき僕が言ったことは聞いていなかったらしい。深い溜息を一つ。

「はいはい、今行きますよ姫華さん！」

「ハイは一回！」

本当にうるさいよアイツは。

怒鳴られて、僕は学校へ急ぐのだった。

帰り道の事だった。僕は一人で歩いている。夕日が町のすべてを

オレンジ色に変えている。10月とはいってもまだ暑い。制服の衣替えは既に終わって、今は冬バージョンだ。僕はもう汗をかいてしまっている。少しは涼しい場所を見つけようとしているのだが、田舎といっても杉並区である。涼むのに適している木陰や森林は少ない。近くと言ったら、この近くに存在する久我山駅からだいたい2キロ先にある井の頭公園くらいだ。徒歩で行くには少し遠いし、電車でお金をかけてまで行きたいというわけでもなかった。

「……。川の近くにいつてみようかな」

川の上というのは、少なからず空気が流れている。少しは涼しいかもしれないと僕は思った。近くの川、神田川である。……「神田川」と聞くと、何故かがぐや姫の「神田川」を思い出す。

「あなたはもう忘れたかしら。赤い手ぬぐいマフラーにして。……

……暑い」

マフラーなんかしたくないわ暑苦しい！ と、心の中でノリつつこみしてみたのだが全くおもしろくない。

「バカだなあ、僕って……」

僕はその川に沿って歩いていく。ふと立ち止まって、川を見てみた。……気付いたのだけれど、さほど涼しいとは感じなかった。神田川は荒川水系の一部で、法律的にはちゃんとした支流として認められているらしい。しかしよく見ると、その流れはとても遅い。まあ、結果的には空気の流れも遅いという事だ。

——それは、本当に不意のことだった。小さくてよく見えないのだが、橋の下（だいたい四畳くらいの川原）に、一人でポツンと佇んでいる——女の子？

女の子だった。何故こんな所に？ 気付かれないように、少し近くに寄ってよく見てみると、セーラー服を身に纏っている。

「あの制服、僕の中学時代の女子のやつと同じ……」

そう。そのセーラー服は、確かに僕の通っていた中学校の制服だった。でも、その姿はボロボロで、痛々しかったのだ。一体どうし

たのだろうか。もしかして……いじめとか？ それなら尚更である。僕はもうその姿を黙って見ていられず、近くの川に降りる階段を見つけて、女の子の近くに行ってみる事にした。しかし、その足取りは重く、うまく進んでくれない。

「……迷うな」

と、僕は心に喝を入れた後、ゆっくりながらも女の子の方へ近寄っていく。……まだ気付かれない……。まだ気付かれない……。結局、その女の子の距離はだいたい5メートルの所まで来ていた。まだ気付いていないらしい。不思議な事に、座り込んでいるその足元には小さなブルーシートが敷かれていた。いや、余計な事考えてるばあいじゃないよな。と、僕は勇気を出して声をかけてみる事にした。

「あのっ……」

声をかけようとしたその刹那、その女の子は、掠れるような声で小さく、美しく歌い始めた。

「……あなたはもう忘れたかしら。赤い手ぬぐいマフラーにして……」

……「神田川」だった。さっき僕がバカみたいに歌っていた「神田川」だった。うわぁ……。なんかリアルだな。姿が姿だからだろうか、外はうだるように暑いのに、その女の子は本当にマフラーがしたいくらい寒いかにように体を少しばかり震わせている。

近くに来てみると、その姿がはつきり見える。髪型は黒髪のショートカットだが、後ろの方は少し長め。顔立ちを整っていて女の子らしくもキリッとしている。僕から見るとはとても可愛い。身長はざっと見て160センチくらい……。かな？ 着ている制服はやはりボロボロで、さっきまで不良と喧嘩していたような状況を思い立たせる風貌だ。コンクリートの壁に寄り掛かって、向こう岸をじっと見つめながら静かに歌っている。

……結局、女の子は「神田川」を全て歌い切ったようで、向こう岸をじっと見ていた目を地面に視線を落としたのだった。

あっ！ と、僕は本来の目的を思い出す。話しかけなきゃ。

「あ、あの」

やっと気付いてくれたようで、ゆっくりこちらの方を向いてくれた。

「えっ！ あっあなた、誰ですか!？」

本当に驚いたようにその身を起こして言うのだった。

「いえ、あのつ、僕は前川陸斗という者ですが……」

「まさか、私を襲う事が目的とか？ こんないたいたいけな女の子を襲う気ですか？ そんな事は絶対に許されませんよ!」

「違うわ!! なんて襲わなきゃいけないんだよ!？」

「ふふ。そんなこと言つて、どうせ私を見つけた時から欲情していったんでしょう？ 男の人つてこれだから変態なんですよね」

「だから違うつて! なんて話しかけただけで、こんな事言われなきゃならないんだよ!」

正直、びっくりしたのは僕の方だ。こんなヤツだったんだ。可愛いのに……。

「ふっ、あはははは……」

急に笑い出しやがったし……。

「いや、本当にごめんなさい。嘘ですよ、嘘」

「初対面の人間に嘘をつく人を初めて見ましたよ」

「いやあ、久しぶりに人を見たんで気が動転しちゃって」

「絶対わざとですよね……」

「あはは、ごめんなさい。でも、どうしてここに？」

「いや、ボロボロの制服で何してるんだろうと思って。一体こんな所で何してるんですか？」

尋ねると、その女の子は、盛大に、壮大に言い放ったのだった。

「実は私、ホームレスなんです!!」

## 式番目（後書き）

久しぶりの小説投稿です。簡単に説明すると、この物語は現代社会に対する疑問や諸問題を元に、今の世界の現状を見つめてもらうために造ってみました。

気軽に見てくれれば幸いなのですが、なにせ現代社会を基にしているので、シビアな部分もちょっとは出てくると思います。この小説を見てくださったみなさんも、少しの時間でもいいので、世界に目を向けてみてはいかがでしょうか？

なお、誤字脱字の指摘やコメント・感想もたくさん受け付けます。これからもよろしく願い申し上げます。

## 式番目

「実は私、ホームレスなんです!!」

……。それ、そんなに堂々と大きな声で（しかも腰に手を当てて）言える事なのだろうか？ 僕だったら絶対無理である。

ホームレス。その名の通り、家を持たない人を意味する。事情は人それぞれなのだけれど、この子も何かしらの理由でホームレス生活をしているに違いない。

「はあ、ホームレスですか。だから橋の下なんかブルーシート敷いてるんですね？」

「まあそんなところですよ。それにしてもあなた、よく私に気付きましたね」

「橋に沿って歩いていたら、不意にあなたを見つけたんです。よく見たら着ている制服とかボロボロだし、心配になったので話しかけたんですよ」

「そうだったんですか！？ 心配してくれてありがとうございます……！」

今にも泣き出しそうな顔になって、強く僕の手を握ってきた。ありがとう、ありがとう、とピョンピョン跳ねながら、何度もお礼を言ってくる。

「いや、あの、もういいですから」

「あ……。そ、そうですね。ごめんなさい……」

そう言うとき女の子は僕の手を離し、少し離れて俯うつむいてしまった。気持ち良くない沈黙が二人を包む。ちよつと悪い事しちゃったかな……。

「そつ…….ですよ？ ホームレスなんか、触られたくなんかないですよ。……すみません、調子に乗っちゃって」

「いや、違いますよ。そういう訳じゃないんです。こんな生活して、こんなに元気でいられるなんて。ちょっとびっくりしたただけなんです」

「私、いつもこうなんです。ホントは泣きたいくらい苦しいのに。けど泣きたくても、もう泣けないんです」

彼女は徐に、自分の心境を語り始めた。そして……「もう泣けない」とは、どういう事なのだろうか。

途切れ途切れではあるが、彼女は話し続ける。

「四か月前、家庭崩壊しました。父が、他の人と浮気してたんです。実際、あの頃父は確かに家に帰ってくる時間が遅くなっていました。帰ってこなかった事も何回か。母も私も、父のそういった行動に疑問を持ち始めたんです。そしてあの日、父は急に母に離婚を迫ってきました。『他に女ができた。別れてくれ』それだけ言って母にハッコを押させて、父は家を出て行きました。もちろん母は取り乱しました。毎日泣き続けて、遂には頭がおかしくなって入院したんですよ。でも……、本当に最悪なのはここからでした」

彼女の声色が、急に変わり始める。

「私はまだ中学生、つまり義務教育が基本なんです。しかし、母は重度の精神病で入院。こどもを教育する能力なんて無くなっていました。……私の保護者名義は？ 親戚、いどこ？ そんな私の家系にはいませんでした。私は何処に預けられたと思いますか？ 浮気した父の所でしたよ！ 離婚なんてこんなもんだろみたいな感じで、無感情に家を出て行ったあの男の下に預けられたんですよ！？そして、見知らぬ女もいました。母と私から父を奪った悪魔がいたんです！ 解りますか！？ これから毎日、この男とあのクソ女の下で暮らしていかないとけない苦しみが！！」

彼女は吐息が僕の鼻元にかかるほど、歪んだ顔を近づけてその怒りを言い放つ。僕にはもう、会話の間に言葉を入れる事すらできなかった。激しい口調のまま、更に続ける。

「まさに地獄でした。あの女は私にとっても優しくしてくれましたが、正直言つてとつてもウザかったです。話しかけられても大抵は無視しつこい時は「うぜえんだよ、クソ女!」とか「死ねよ、クソ野郎が!」とか言つて拒絶してましたよ。だけど、それでもあいつは笑つてました。私にはあの状況で出る笑みの理由が解らなかつたんです。そして……一か月前でした。父は、アイツに捨てられました。通帳の中身も空っぽにされて……。あはは、笑えますよね? これで父も一文無しですよ? 会社もクビになり、借金まみれ。しまいには家売つて、私のところから消えました。この時やつと気付いたんです。ああ、あの女の笑みは私からの罵倒に耐える強い姿でなく、これから始まる、私たちの地獄以上の苦しみへの嘲笑だったんだと……」

やつと……彼女は話を終えた。

さっきまでの狂気に満ちた彼女の表情は、今ではすっかり消えている。むしろ……最初に会った時より元気になっていたのだった。「ツライ事は、人に話すと少し楽になれる」とはよく聞くが、本当にそうなのかもしれない。彼女のその過去の話からすると、相当なストレスが溜まっていたのだろう。

彼女が話を終えた後、周りには沈黙が渦巻いていた。身体に感じられていた川の涼しげな空気は、今ではもう寒気にしか感じられない。

俯いてしまった彼女を見て僕は一言、恥ずかしながらにこう言つた。

「……僕の家に来ませんか?」

今、僕は彼女と神田川沿いの道を僕の家に向かって歩いている。

「あのつ、ホントにいいんでしょうか？ 私みたいなのが家にお邪魔しても」

「いいんですよ、遠慮なんかなくても。むしろ大歓迎です！ 小中時代に家に滅多に人を呼ばなかった僕が言うのも難ですけど、人を連れてきた、それも女の子を！ となれば母親も泣いて喜ぶでしょうしね」

「そっそうですか？ 今日は……いろいろとありがとうございます。私の話を聞いてくれたうえに、家にまで招待してくれるなんて、うれしいです」

「礼には及びませんよ。僕はそんなに感謝されるような事もしてません」

久しぶりに歩く路上らしく、僕たちの横を走っていく車にさえも少しばかり怯えている。彼女は僕の腕を掴み、後ろに隠れるように歩く。車が来るたびに、その腕を掴む力が強くなるのだった。……なんか、いい感じ。

ここで僕はある事を思い出す。

「すみません、あの」

「はっはい！ 何でしょうか」

「あなたの名前は……？」

僕の後ろに隠れながら、彼女は言った。

「私は、ひろせ えれな広瀬衣怜那と言います」

## 式番目（後書き）

第一話からずっと投稿していなかった澁谷です。  
本当に申し訳ございませんでした。  
やっと第二話を投稿する事ができます。

これからもよろしく願いします！

なお、誤字脱字の指摘やコメント・感想もたくさん受け付けます。  
これからもよろしく願い申しあげます。

## 参番目（前書き）

久しぶりです。

## 参番目

「私は、広瀬衣怜那ひろせ えれなと言います」

言った直後に車が来て少し怯える。そして続けてこう言った。

「衣怜那の「え」は衣という字。「れ」はりっしんべんに命令の令。「な」は刹那の那。繋げて衣怜那と言います。覚えてくれました？」

「へえー、そんなんですか」と一言、苦笑を浮かべながら言う。

よくよく考えると不思議な名前だ。刹那、つまり一瞬の怜さといを衣のように纏まとう、って意味だ？ などと僕は脳内で勝手に解釈していた。

「私、これからはあなたの事を陸斗さんと呼んでいいでしょうか？」

「ああ、別に気にはしません。呼びたいように呼んでください」

「それと、私に対する敬語はもう必要ありません。タメ口で結構です。あと、もう一つお願いがあります」

突然の要求に戸惑う僕に、彼女は今までにないくらいかしこまって、掴んでいた僕の腕を強く握り引き止める。そして、

「私の事は、衣怜那と、そう呼んでください！ お願いします！」

僕は黙ってしまった。そうだろうな。今まで生きてきて、こんなどこかのゲームのような展開がここで訪れようとは。実は僕は、女子にはほとんどタメ口で会話した事がない。例外も多少いるが、先輩などはもちろん、同級生や中学生との会話は専ら敬語を使っていた。ホント、なんて返答してやればいいのか。全然わからねえ……。困りながら彼女の泣きそうな表情を見る度に、さらに僕を困らせていく。

「ダメでしょうか？ 陸斗さん!？」

これ以上待てないと急かすように、彼女の目には、すでに涙さえ浮かんでいる。いけない、このままでは非常にやりにくい状況になってしまう。今ここで泣かれたらと思うとぞっとする。刻々と迫る彼女の涙腺崩壊。

そしてやっと、僕は決心した。

「わかったよ。これからは普通に喋るよ広瀬さん」

「衣怜那って呼んでください！ 全然改善してないじゃないですか！」

「わかった、わかったから泣くのは止めてくれ！ 泣かれると凄く困るから！」

「じゃあちゃんと言ってください！ 今度こそ本当に」

「……えっ衣怜那。これでいいだろ？」

「はい！ 陸斗さん！」

彼女が泣いてしまう事態は何とか避けられた。もう疲れた。思えば今日、単に暑いからという理由で川沿いを歩いていただけなのに、気付けばもう夕方6時半。あたりは暗くなり、街には灯りが点る。濃いオレンジに染まった空には、まばらに星が見え始めている。僕たちはもう家の近くまで来ていた。

そして僕はまだ、彼女に腕を掴まれている。

僕の家。別に立派とはいえない家だ。横幅・奥行きが狭いが四階建てで、ほぼ同じ体積の空き家と隣り合っている。ちなみに言うところの空き家は僕の家が所有している。まだ小さかった頃、僕の祖父がこの空き家を買った。

「ただいま」

玄関のドアを開けて、誰かが出てくるのを待つ。廊下は薄暗く、その先にある居間だけが明るく照らされていた。

「おかえり陸兄……、もう飯の時間だよ」

結局誰も出てこず、居間からは妹の声だけが虚しく聞こえた。

「陸斗さんには妹さんがいらしたんですか？」

「まあね。凶暴な妹だけど」

「元氣な証拠だと思えます。きっとカワイイ妹さんなんだろうなあ。お肌とかツヤツヤそうです！」

「いや、勝手な妄想を広げないでくれ。全然かわいくないから」

「早く入ってきなよお。飯冷めるぞお。全部食っちゃうよ？」

催促のような脅しに焦る。仕方なく僕は衣怜那の事を一つも伝え  
ないまま、居間へ入っていく。

ドアを開けると、そこには妹と母さんがいた。二人とも、テーブ  
ルにある夕飯を早くも啄<sup>つば</sup>んでいた。

「遅いぞ陸斗。何をしていた？」

そう言っただけで冷めた目で僕の方を睨む。が、すぐにその目を丸くし  
た。ついでに妹も。

「陸斗が……こいつが人を、しかも女を連れてきただお!？」

うるさいよ。悪いか母さん……。妹はというと、持っていた箸を  
落とし、唐揚げを口に頬張った状態で静止してこちらを見ている。

「僕が人を連れてきた事がそんなに珍しいかよ」

「ああ、びっくりした」

「陸兄が女の人!? 彼女をつれてきたあ!？」

「彼女じゃねーよ!」

馬鹿な親子だった。妹に限っては変な妄想まで始めている。

「いやあ彼女だなんて……恥ずかしいですよお」

「お前もかよ!」

頬を赤くして、恥ずかしそうに身体をくねくねさせている。

親子? 否、馬鹿な女どもだった。

「つたく、普通の友達だよ。ついさっき知り合っただけ……、  
なんていうか」

きまりの悪い曖昧な言い訳を云っていると、母さんは無視してい  
まだにくねくねしている少女に興味を示した。

「その制服少女ちゃん。制服がボロボロだが? まさか、ウチの  
陸斗がキミに手を出したかな? レイプとか?」

「違うわアホ!」

「陸斗さんはその……ちょっと強引だったけど……ああゆうのも……」  
「それ以上言うなよ!」

この家出ていきよ！　なんだよこの変態集団。

「はは！　面白い少女だ。名前を聞こう」

「私、広瀬衣怜那といいます。初めまして。陸斗さんとはついさっき会ったばかりです。なんていうか、死の淵から助けてもらった感じです」

「うん、そうか。キミの状貌を見るに、ホームレスかな？　制服がボロボロなのはそれでか」

「へ？　なんで判ったんですか？」

「勘かな？」

勘のいい母は、最初から気づいていたようだ。さっきの馬鹿な会話は母なりの気遣い？　といったところだろうか。

「途方に暮れる少女か。親でも亡くしたのか？」

「……違うんです」

ここで衣怜那は、橋の下で僕に言った一連の事情を母さんに話した。今度は前と違って感情的にならずに、ゆっくりと落ち着いて話していた。でも、話した内容は変わらない。聞いているだけでいやになってくる。親のいる僕、人間はどんなに幸せなのだろうと。

話終えた後、母さんはただ「なるほど」と一言。そして妹に

「鍵」

言われた妹は黙って、母さんが指定したらしいその鍵を持ってきた。

「母さん、この鍵は？」

僕は聞く。家にこんな鍵あったわけ？　とにかく初めて見る物だった。

「ああ、隣の空き家の鍵だ。制服少女、キミにこの鍵をあげよう。これからはキミがあれの住人だ。喜べ」

僕も衣怜那も、目を丸くした。

「マジすか……？」

僕は言う。

「そのままだ。あの空き家を少女に与える。私にはいらん所有物だからな。他に言う事はなにもないよ」

祖父、じいさんからもらったこの空き家を、母はあっさり明け渡した。名残惜しさなど一つもないといって。一方の彼女、衣怜那は固まっていた。

「……本当、ですか？」

「ああ。好きなように使っていていい」

そして、……彼女はもう何も言えず……バタリと膝を落とし、自分の顔を抑えた。

涙、涙、涙、……。

本当に、幼い子供のように、泣いたのだった。そこには、今はいない彼女の母がいて、優しく抱きしめているような、そんな風景が僕には見える。

「私……私は、全然……不幸なんかじゃなかったんですね……」

途切れ途切れの声で彼女は言った。母は衣怜那をなだめ、妹はもらい泣き。

そして僕も、知らないうちに、涙が毀これていたのだった。

## 参番目（後書き）

ホントに久しぶりですよ。

友達はなんかすごくこのサイトへの小説投稿も頑張っているようです。

チャレンジする事が凄く好きなんですネ、多分……

そんな友達がぼくは好きです！

さて！ 次回は……いつかな……

なお、誤字脱字の指摘やコメント・感想もたくさん受け付けます。

これからもよろしくお願い申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0657j/>

---

それぞれの物語      1, 「恨みの物語」

2010年10月9日01時28分発行